

# 朝鮮半島と琉球諸島における銭貨流通と出土銭

門田 誠一

## 序

円形方孔の穴あき銭は戦国時代・秦代の中国において創案され、以降、東アジアの銭を特徴づける形態となった。中国の周辺においても、銭が鑄造された王朝は数多いが、銭をもたない地域や王権が銭の鑄造に至るまでの過程に固有の歴史性が濃縮されていることが多い。

本論では中国の周辺地域においても、貨幣の発行と流通が比較的後代になって行われた朝鮮半島と琉球諸島という二つの地域を対象として、銭の流通と出土銭とに注目しながら、考古学的な視点から、今後の検討に資すべき方向性の模索を試図する。

## 1 統一新羅時代以前の出土銭

朝鮮半島において銭貨が公鑄されるのは次項にみるように高麗時代に入ってからであるが、それ以前のいわゆる統一新羅時代や三国時代、さらにさかのぼって無文土器を使用した頃から中国の銭貨がもたらされていたことが考古学資料によって明らかにされている。朝鮮半島のもっとも古い段階の出土銭は明刀銭であって、これは戦国時代の燕において鑄造され、使用されていたものが朝鮮民主主義人民共和国や中国・遼寧省の遺跡において出土している。出土遺跡の性格については、積石を伴う墳墓に約 400 枚の明刀銭が埋納されていたことで有名な龍淵洞遺跡（平安北道渭原郡）を典型として墳墓に埋納された類例や細竹里遺跡に代表されるように集落内から散在した状態で発見される類例があるが、これ以外にも他に故意に埋蔵したとみられる遺構がある。たとえば細竹里遺跡では住居址付近の土坑内から 2500 枚余りの明刀銭が 50 枚ずつ束ねた状態で発見されており、田村晃一氏は後の流通のために一時的に埋蔵したものと位置づけている。とくに明刀銭が一カ所で大量に発見される場合は埋納遺跡とみてもよいであろう。明刀銭は現在のところ遼河以東大同江以西で出土しており、戦国時代の燕を中心とした地域との交易や交渉によってもたらされたものであると思われる。明刀銭の出土遺跡や遺構からは、それらを中国系移民のもたらしたものとかが、土着民の残したものであるというような単純な一元的理解は不相当だと考えられるが、積石墓などに示されるように漢民族以外の特色をもった墳墓から出土した明刀銭は高句麗ないしはその祖である「貉」などによって残されたものであって、貨幣的役割を果たすものとして流通していたとみられている。[1]

漢王朝と朝鮮半島との交渉を示す考古資料として、注目されるのが昌原・茶戸里 1 号墳である。この墓では一木を刳り抜いて蓋と身を造った木棺の下部に掘られた小坑に漆塗りの籠が納められて

おり、多数の遺物が出土した。この施設そのものが中国では殷代以降の墳墓にしばしばみられる腰坑と同様の施設であり、さらに、その中からは漆製品、前漢代の銅鏡とともに筆や刀子、五銖銭が出土している。漢鏡や五銖銭といった直接もたらされた品々のみならず、筆の長さも漢代の1尺に該当することが判明しており、茶戸里1号墳は漢代の中国文化が色濃く現われている墳墓の典型として広く知られている。

漢代以降の銭貨として、五銖銭や貨泉の出土遺跡が集成されているが、[2] なかでも特筆されるものとしては巨文島における五銖銭74枚を含む980点におよぶ中国銭の発見があげられる[3]。おそらくは難船によるものであるだろうが、そうであるとすれば時代としては漢代にもたらされたものかどうかは確実ではない。

五銖銭および新・王莽代の貨泉出土遺跡の性格として注目したいのは韓国の西部海岸沿いに立地するものが多い点である。たとえば、貨泉の出土した群谷里貝塚（全羅南道海南郡）は往時の海岸線に位置している。また、南東部では貨泉の出土した金海貝塚のように海岸近くに営まれている遺跡が知られている。その他にも五銖銭4点と貨泉11点、大泉五十2点、貨布1点という新代の貨幣が出土した済州島の山地港遺跡のような島嶼に立地するものが顕著なように、いずれも中国との海上航路と関係する立地であると考えられる。すなわち、これらの銭貨出土遺跡が地理的に注目されるのは日本列島、朝鮮半島、楽浪郡ないしは中国本土をつなぐ交通の結節点にあることであって、朝鮮半島南海岸や島嶼部のみならず、日本列島における中国、朝鮮系文物やそれを携えた人々の動きを解明する上で重要な鍵となる。

やや時代が下り、百濟初期の王墓を含むと考えられているソウル・石村洞古墳群のなかの4号墳から出土した軒丸瓦には銭貨の文様が配されていることが注目される（図3）。[4] これは瓦当面を4区分し、それぞれに円形方孔の穴あき銭を文様として表出したもので、銭貨文の瓦当は中国でも類例がなく、まして百濟を含む朝鮮三国時代には未だ貨幣の発行は行われていなかったもので、その意味するところが注目される。この古墳の年代は4世紀後半から5世紀初頭頃と考えられており、当時の中国では東晋代に並行する。東晋代を含めて、一般に魏晋南北朝時代には銭貨の鑄造は衰退しており、百濟が通交を行っていた江南地域の六朝時代にも全般として銭貨の不足した状態が続いた。[5] とくに西晋頃の拜金思想について、これを揶揄した『銭神論』という書物が著されるにいたったほどである。[6] 呉代以降、西晋、東晋代には墓に銭を副葬するのみならず、銭文を施した墓磚や陶器も広く埋納される。このような中国の現象を基底において、百濟初期における銭文瓦当の出現に対する現段階の筆者の理解としては、「富貴」などの語を入れていた漢代の瓦当と基本的には同じ意味をもちながら、当時の中国における銭貨への傾倒を受けて、一種の憧憬をも込めながら、墓の主である百濟王や王族の死後における富貴を願



図1: 石村洞4号墳出土の銭文瓦当

うという意図をもっていたと考えている。石村洞出土の瓦当に配された銭文の大きさが、三国時代の呉において鑄造され、大きな貨幣価値をもった「大銭」とほぼ同じ大きさであることもこのことを傍証するものと考えられる。

その後、統一新羅時代に至るまでの銭と関連する考古資料としては、金海・礼安里 49 号墳からは五銖銭を象った 一帯金具が知られる（図 3 の 3 ~ 9）。この古墳の年代は報告書では 6 世紀後半から 7 世紀前半頃とされているが、追葬が行われているため時間幅が考えられる。銭を象った同様の 一帯金具は新羅の王都である慶州の皇龍寺からも出土している。これらについては出土土器などから 7 世紀代のものとみられている。[7]

## 2 高麗時代から朝鮮王朝時代の銭貨

朝鮮半島において銭貨が発行、鑄造されたのは高麗時代に入ってからであって、それ以前の統一新羅にも中国銭の流入は想定されるが、高麗時代の実態から遡及してそれ以外にはおそらく布などの実物貨幣を使用していたものと考えられている。[8]

高麗時代の貨幣としては開城付近の高麗王陵から出土した鉄銭がもっともはやい時期のものと考えられる場合が多いが、[9] 出土状況その他が明らかでなく、これを認めるとしても埋葬に用いるためにとくに鑄造された副葬用の銭であるとみてよからう。

高麗時代において、流通を念頭においたもっとも早い段階の銭貨として、成宗 15 年（996）に「始用鉄銭」（『高麗史』巻 79 食貨志 2 貨幣条）としてみえる「鉄銭」については、唐代の肅宗 2 年（759）から鑄造された「乾元重宝」をほとんどそのまま模したものが鑄造されたとみられている。[10] また、「乾元重宝」の背面に「東国」という文字を鑄出した銭も知られており（図 3 の 10）、これらの高麗時代における最初期の銭は中国銭そのものの信用価値を基本とすることなしには存在しえないものであって、当時の中華世界における銭貨に対する観念の一端を端的に示している。

また、肅宗 7 年 12 月（1102）には「海東通宝」が鑄造され、その後、具体的な時期や発行順は分明ではないが、高麗時代の銭貨としては「海東重宝」「三韓通宝」「三韓重宝」「東国通宝」「東国重宝」などが鑄造された。[11]

しかし、概して高麗朝における貨幣政策は混乱を極め、銭貨の使用は改廃を繰り返すことになる。このような貨幣政策の迷走によって、貨幣経済が定着をみることなく、次の李氏朝鮮王朝時代に入るまで、貨幣の一般的な流通は行われず、相変わらず、布貨と呼ばれる麻布などの実物貨幣が流通していたとみられている。

朝鮮王朝時代に入っても貨幣政策はますます不安定であって、その初期には銅銭使用の強制、廃止さらには紙幣である楮貨の使用なども試みられるが、これらは極めて短期間に改廃され、混乱を助長することになる。このようななかで貨幣の発行と流通の基本となる政府の信用そのものが一時、喪失したことが、朝鮮王朝初期における銭貨流通を疎外する根本的な要因の一つとなったのであろう。

その後、朝鮮王朝において広く流通する銭貨は肅宗 4 年（1678）に初鑄された「常平通宝」を俟たねばならない。この銭貨は高宗 25 年（1888）までの 250 年余の間に諸所の官署や地方で鑄造さ

れた。「常平通宝」の背面には鑄造地や鑄造官司の一文字が入っているが、その文字種だけでも 38 種類にも及び、また字体などの違いによる「常平通宝」の種類は 3800 にものぼるとされる。[12] このことは常平通宝の鑄造が長期間にわたり、かつ鑄造および流通が広く行われていたことを端的に示している。

高麗から朝鮮王朝の時期にかけては錢貨のほかに楮貨という紙幣の発行が計画されたが、実施されるにはいたらず、かえって貨幣政策の混乱をまねくことになった。[13]

このように高麗から朝鮮王朝時代のはやい時期にかけては、政府の貨幣政策が定まらず、そのこと自体が貨幣制度開始期にもっとも肝要な貨幣の信用創出に失敗することになり、これが高麗から朝鮮王朝時代初期にかけて、錢貨の流通を軌道に乗せられなかった大きな要因の一つであると思われる。

### 3 琉球諸島の出土錢

琉球諸島において発見されている錢貨のなかで、もっとも古い時期のものとしては明刀錢がよく知られている。1923 年に那覇市の城嶽貝塚で発見され、[14] その後、1992 年には具志頭村の具志頭城北東崖下の洞穴からも発見されている。(図 3 の 1、2) [15] これらは発掘調査によるものではないため、出土状態や層位などの詳細は不明であるが、中国の戦国時代の貨幣である明刀錢が、琉球諸島にもたらされている可能性は十分に留保しておくべきであろう。ただし、その場合、琉球諸島にもたらされた時期が同時代かどうかという点と流入の過程あるいは経路が問題となる。これまでは、琉球諸島の五銖錢も含めて、いったん北部九州などを経由してもたらされたとする見方が多かった。[16] しかしながら近年、琉球諸島においては五銖錢の出土遺跡数や出土数が増加しており、また久米島では一島で複数の遺跡から相当数の五銖錢が出土していることから、南島出土の五銖錢に対しては、従来のように北部九州を経由してもたらされたとみるよりは、中国大陸ないしはその媒介者との直接の交渉によってもたらされた蓋然性が示唆されるにいたっている。[17]

同じように、琉球諸島から出土した唐の開元通宝についても、[18] 従前は帰国の途半ばにして倒れた遣唐使の墓に供えられたという考え方があった。[19] しかしながら、琉球諸島における 10 世紀以前の開元通宝出土遺跡は 30 遺跡を越え、加えて、石垣島の崎枝・赤崎遺跡では、開元通宝のみの組み合わせで、上下の層位から、27 枚と 6 枚、合計 33 枚が出土していることからみても、[20] これらの開元通宝が偶発的な契機によってもたらされたとは考えにくくなっている。

また、西表島の仲間第一貝塚では背面に「福」の字が陽鑄された開元通宝が発見されている。[21] 唐では会昌年間に廢仏政策がとられ、仏像や梵鐘などを原材料として開元通宝を鑄造して、とくに華南地域の錢不足を補おうとした。会昌開元錢といわれるものであり、背面には鑄造地の漢字一字が入れられた。[22] 仲間第一貝塚採集の会昌開元通宝は背面の文字から、中国の福州で鑄造されたことが知られる。採集資料であるため、この錢をとりまく考古学的条件が不確実ではあるとしても、鑄造地である福州を含めた越地域との地理的な距離からも、東中国海を通じた海上経路によって、直接、西表島にもたらされた可能性を基本として考察を進めるべきであろう。[23]

琉球諸島のなかでも、沖縄本島を中心として 10 世紀頃までの遺跡から出土する開元通宝につい

ては、これらをもたらしした交易とその結果としての経済的基盤の醸成を重視し、後に按司と呼ばれる在地権力層の輩出の背景としてとらえようとする方向性が示されている。[24]

その後、琉球王朝のもとでは「世高通宝」「大世通宝」その他の独自の銭が鑄造されたが、それらに関する考古学的な知見はきわめて乏しい。むしろ、琉球王朝時代の銭の中で、考古学資料として注目されるのは「鳩目銭」である。東恩那寛惇は寛永20年(1644)の徳川幕府による私鑄銭の禁止によって薩摩において鑄造されていた加治木銭が廢銭となり、これを琉球に持ち込んで改鑄されたものが、当間銭と呼ばれる鳩目銭であるとしている。[25] この見解に表れているように、鳩目銭は琉球王朝自体が発行した銭ではなく、いわゆる私鑄銭と考えられるが、簡易な方法によって、かなりの数量が鑄造されたものと思われる。この銭は粗雑な鑄造による質の悪い銭であり、極めて薄く、指で挟むと折れてしまうようなものも含まれている。当間銭の琉球における鑄造は池原の石碑(沖縄県沖縄市)の碑文から1657年とされているが(図2)、異説もあり、[26] 鑄造遺跡についての調査は行われていないため、考古学的には言及できない状況である。



図2: 沖縄県 池原の石碑

近年、考古学調査によって鳩目銭の出土する例が知られるようになってきている。知念村の斎場御嶽は聞得大君が琉球王朝の祭祀を主催した聖地であることで知られるが、1998年の発掘調査によって「三庫理」といわれる個所から、金の勾玉、青磁碗などとともに金の鳩目銭が出土した。[27] また、那覇市首里の園比屋武御嶽でも金の鳩目銭が1956年に出土している。園比屋武御嶽は1519年に尚真王によって建てられたもので、琉球国王をはじめ聞得大君が参拝した国家的な祭場であった。ただし、園比屋武御嶽出土の金の鳩目銭については、尚真王の時代ではなく、江戸時代のものとする見方もある。[28] しかし、いずれにしても、これらの例から金の鳩目銭は琉球王朝の祭祀に用いられたものであることは確実であろう。

また、宜野湾市のクシヌ御嶽(カネノ森)では海砂利の敷かれた祭場の下から地鎮のための鳩目銭が大量に出土している(調査範囲では44点)。伴出遺物から17世紀中葉から18世紀前半頃に形成されはじめ、下限は明治末年頃とみられている(図3の11~14)。[29]

## 4 朝鮮半島と琉球諸島の錢貨の特質 - 東アジアの社会と經濟の様相の中で -

朝鮮半島と琉球諸島における錢貨について出土資料と文献史料の双方から概略してきたが、最後に両者の特質について、東アジアの社会や經濟のなかで、筆者の力のおよぶ範囲において位置づけを試みてみたい。

朝鮮半島の政治勢力は歴史的に中国の王朝との政治的な相対的關係のとり方が重要な政策の一つであり、それぞれの政權の歴史性そのものも、そこに内在する所以となっていることは言を俟たない。

そのなかで、『後漢書』韓伝には光武帝の建武 20 年(44)に韓人廉斯人の蘇馬らが楽浪郡に貢獻して、「漢廉斯邑君」に封ぜられ、以降も朝貢することになった、という記述があり、漢王朝と三韓諸国との間で行われた交渉の実態的側面を具体的に示している例としてしばしばあげられる。このような漢王朝との直接の交渉を表す考古資料としてあげた茶戸里 1 号墳については、この「廉斯邑」を茶戸里の周辺に比定しようとする見解も示されている。[30] その是非についてはさらなる傍証が必要としても、茶戸里 1 号墳の被葬者像は漢王朝、実際にはその辺郡である楽浪郡と直接の交渉をもっていた階層に求められよう。漢代を下る史料であるが、『三国志』魏書韓伝には、「臣智」をはじめとして、それに次ぐ「邑君」「邑長」などの韓諸国の首長層に対して、魏が印綬を下賜し、さらに下位の「下戸」にいたっては帯方郡に行き、印綬や衣服、被りものをつけるものが 1000 人以上もいた、という記述に認められるように、3 世紀代には朝鮮半島の政治勢力と直接の交渉が一般化していた。

いっぽう、すでにふれたように五銖錢および新・王莽代の貨泉出土遺跡の性格として注目したいのは韓国の西部ないしは南部の海岸沿いや島嶼に立地するものが顕著である点であって、いずれも中国との海上航路と関係する立地であると考えられる。さらに、韓国西海岸では、原三国(三韓)時代から三国時代にかけて、卜骨が出土する遺跡があることが知られており、群谷里貝塚や金海地域では鳳凰台、府院洞、楽民洞の諸遺跡で卜骨が出土している。[31]

このような出土遺跡の分布からは、卜骨の行われた重要な意味として、海上航路の安全に対する占い祭祀を考えるのが穏当と考える。その後三国時代に入ると中国錢そのものの出土例はほとんど知られなくなるが、これは後漢末の政治的、社会的混乱から始まり、魏晋南北朝期にかけて打ち続く、中国における錢貨の流通量の不足に一因があるものと考えられる。そして中国自体において錢不足であった時期に、百済においては錢を文様化した軒丸瓦が王陵級の古墳に使用されていたことが重要である。このことは南朝における錢に対する価値観が 4 世紀代の百済に及んだ結果であり、物質のみならず思惟や觀念のような無形のものが、南朝から百済に及んでいた証左となる。

また、三国時代の後半期の所産とされる金海・礼安里 49 号墳から錢を文様として配した帯金具が出土していることも、当時の錢に対する価値観と渴望を示すものと位置づけておきたい。

錢そのものの鑄造は高麗時代にいたって行われるが、もっとも早い段階の錢が唐代の「乾元重

宝」を模したものであることは、中国銭の信用や価値を背景とした鑄銭の状況が想定される。また、「乾元重宝」の背面に「東国」と陽鑄したものについては、この時点では鑄銭地を背面に記すことによって、唐銭の信用や価値への全面的な依存から脱却しようとする意図もみとれる。ただし、背面に鑄造地の一文字をいれることは、中国の内部で一般に行われることであり、この点では柵封秩序から踏み出すことはなく、中華世界における銭貨鑄造という桎梏を脱していないといえよう。

朝鮮王朝時代に入っても貨幣政策は転変を繰り返し、その結果として銭の信用が失墜することになり、実物貨幣である布貨（綿布）の流通が支配的であった。名実ともに本格的に銭貨の鑄造と流通は「常平通宝」の鑄造がなされて以降であり、貨幣経済の展開をもたらしたのである。自余の問題は朝鮮王朝の経済政策や社会経済研究の直接の対象となり、考古学的な検討を主眼とする本論の論及する範囲を逸しているため、これに関する専論を参照されたい。

「常平通宝」そのものの観察から言及できるのは、背面に陽鑄された文字から、多くの地域および官署で鑄造されていたことが知られる点であるが、このような政府直轄の単一の鑄造所によるのではなく多種に及ぶことは朝鮮王朝に限らず、東アジアにおける前近代の貨幣鑄造の特色となっている。

琉球諸島の銭貨に眼を移すと、まず五銖銭の出土遺跡が増加していることが注意される。すでにふれたように、これまでは北部九州に流入した五銖銭が二次的に琉球諸島にもたらされたとみられていたが、五銖銭のみからなる出土例が数カ所も知られている久米島における遺跡のあり方から推定されるように、直接に中国ないしは朝鮮半島からもたらされた可能性を考える見解に賛意を表したい。

開元通宝についても同断であって、採集資料ではあるが、西表島仲間第一貝塚の会昌開元銭の存在は、福州などの越地方と琉球諸島との海路の交渉によってもたらされた可能性を示している。

琉球王朝では銭の鑄造は行われたが、実態的な流通にいたったかどうかは未だ明らかでなく、むしろ、考古学的検討に資すべきものとしては、御嶽から出土する鳩目銭が注目される。琉球王朝の祭場である斎場御嶽から金の勾玉とともに出土した金の鳩目銭の存在が、実物の鳩目銭そのものの価値に基づいていると考えられるならば、琉球王の周辺においてさえ、悪銭である鳩目銭が重用されていたことが想定されるのである。

その他にも、御嶽の地鎮に用いられた鳩目銭が知られており、悪銭とされてきた鳩目銭が琉球王朝における社会や習俗のなかで、重要な役割を担っていたことが近年の考古学調査によって明らかになってきた。本論でふれた諸例も、正式な報告をまたなければ詳論できないが、今後の検討課題が深まってきたことに意義を見出させよう。

## 5 結語

現在も沖縄地方で行われているウチカビという紙銭がある。これは薄い紙に鳩目銭の形をした印形を押捺したもので、葬祭のおりに一般に用いられるものである。[32] この資料に明らかなように、銭という対象は、考古学、歴史学、民俗学の複数の研究課題を内包しており、銭の考究が複眼的な視座から行われるべきであることを示している。

本論では朝鮮半島と琉球諸島の出土銭と流通した銭貨とを考古学的な視点から瞥見してきたが、対象とした時代は長く、参照すべき学問分野も多岐にわたるために、問題意識の持ち方とそれらの課題に対する吟味の方向性を中心として論じた。最後に例示したように、銭は社会経済史の研究対象であるだけでなく、人間生活の多様な側面と関わっているがゆえに豊かな資料性をもっていることを確認しつつ、小論を閉じることとしたい。

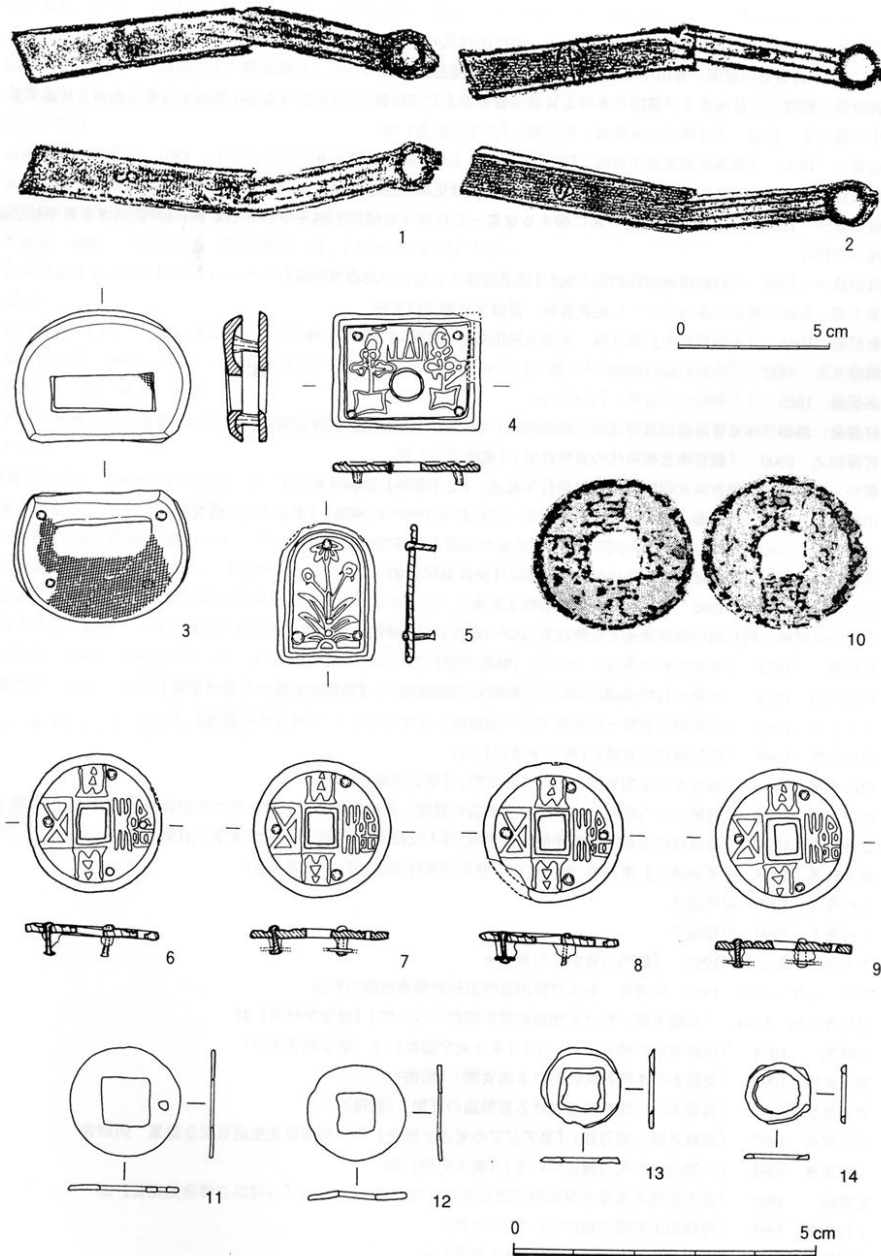


図1 朝鮮半島および琉球諸島の出土銭貨と関連資料

- 1 城獄貝塚の明刀銭
- 2 具志頭村・具志頭城北崖下洞窟の明刀銭
- 3～9 金海・礼安里49号墳出土 五銖銭文鈔帯金具（一部のみ）
- 10 乾元重宝 背「東国」（右側が背面）
- 11～14 宜野湾市クシヌ御嶽出土の鳩目銭（一部のみ）



## 参考文献

- [1] 村見一 1994 「楽浪郡設置前夜の考古学 - 清川江以北の明刀銭出土遺跡の再検討 -」 『東アジア世界史の展開 - 青山学院大学東洋史論集 -』汲古書院
- [2] 崎敬 1982 「日本および韓国における貨泉・貨布および五銖銭について」 『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』  
小田富士雄 1992 「日韓出土五銖銭・第2報」 『古文化談叢』28
- [3] 健吉 1990 「南海岸地方漢代貨幣」 『昌山金正基博士華甲記念論叢』\*
- [4] 田修一 1987 「考古学から見た百濟前期都城」 『朝鮮史研究会論文集』24  
亀田修一 1984 「百濟漢城時代の瓦に関する覚書 - 石村洞4号墳出土例を中心として -」 『尹武炳博士華甲記念論叢』通川文化社  
亀田修一 1996 「百濟漢城時代の瓦と城」 『第2回百濟史定立のための学術セミナー - 第1部 百濟の建国と漢城時代 -』発表資料  
百濟文化開発研究院
- [5] 信威 1988 『中国貨幣史』第3版 上海人民出版社（初版は1958年）\*  
岡崎文夫 1932 「南朝の銭貨問題」 『支那学』6 - 4  
高橋徹 1965 「六朝時代の貨幣」 『史潮』90  
何茲全 1949 「東晋南北朝の銭幣使用と銭幣問題」 『中国科学院歴史語言研究所刊』14  
宮澤知之 2000 「魏晋南北朝時代の貨幣經濟」 『鷹陵史学』26  
薛平 1994 「論魏晋南北朝時期的貨幣發行と流通」 『史学月刊』1994-1 \*  
山田勝芳 1999 「後漢 - 三国時代貨幣史研究 - 古代から中世への展開」 『東北アジア研究』3
- [6] 原啓郎 1992 「銭神論」の分析（上） 『京都外国語大学研究論叢』39
- [7] 藤玄三 1988 「新羅・渤海時代の「か帯金具」」 『法政史学』40  
釜山大学校博物館 1985 『金海礼安里古墳群』\*
- [8] 麗から朝鮮王朝初期の銭貨鑄造と貨幣政策については下記の諸論考を参照。  
宮原兎一 1951 「朝鮮初期の銅銭について」 『朝鮮学報』2  
奥村周司 1975 「高麗の貨幣流通について - 朝貢との関連性 -」 『早稲田実業学校研究紀要』  
井上正夫 1992 「高麗朝の貨幣 - 中世東アジア通貨圏を背景にして -」 『青丘学術論集』2  
須川英徳 1998 「朝鮮時代の貨幣」 『歴史学研究』711  
須川英徳 1993 「高麗から李朝初期における諸貨幣」 『歴史評論』516  
須川英徳 1997 「高麗末から朝鮮初における貨幣論の展開」 武田幸男編 『朝鮮社会の史的展開とアジア』  
北村秀人 1999 「高麗時代前期の銭貨使用政策管見」 『人文研究』（大阪市立大学文学）51 第2分冊
- [9] 平昌洪 1938 『東亜銭志』第15巻 岩波書店（歴史図書社再版1974では第5巻）
- [10] 村秀人 1999 前掲論文
- [11] 村秀人 1999 前掲論文  
チャン・サンジン 1997 『韓国の貨幣』大苑社\*
- [12] ヤン・サンジン 1997 前掲書 および韓国造幣公社貨幣博物館の解説
- [13] 村専之助 1934 「高麗末期に於ける楮貨制採用問題について」 『歴史学研究』41  
宮原兎一 1954 「朝鮮初期の楮貨について」 『東洋史学論集』3（東京教育大学）  
須川英徳 1993 「高麗から李朝初期における諸貨幣」（前掲）  
須川英徳 1997 「高麗末から朝鮮初における貨幣論の展開」（前掲）
- [14] 宮廣衛 1987 「城嶽貝塚と明刀銭」 『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念論集 同朋舎  
上村俊雄 1991 「沖繩出土の明刀銭について」 『鹿大史学』39
- [15] 眞嗣一 1997 「具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀銭について」 『沖繩県立博物館紀要』23
- [16] 村俊雄 1991 「沖繩出土の明刀銭について」（前掲）
- [17] 村俊雄 1992 「沖繩諸島出土の五銖銭」 『鹿大史学』40  
木下尚子 2000 「銭貨からみた奄美・沖繩地域の交流史」 『古代文化』52-3 ではとくに久米島出土の五銖銭について、久米島の歴史的特殊性を強調している。
- [18] 琉球島出土の開元通宝については下記の文献を参照。  
安里嗣淳 1991 「中国唐代貨物銭「開元通宝」と琉球圏の形成」 『沖繩県教育委員会文化課紀要』7  
高宮廣衛 1996 「琉球弧および台湾出土の開元通宝 - 特に7～12世紀ごろの遺跡を中心に -」 『南島文化』18  
王仲殊 1998 「論漢唐時代銅銭在辺境外国流伝」 『考古』1998-12  
山里純一 1999 「南島出土の開元通宝」 『古代日本と南島の交流』
- [19] 関丈夫 「野国貝塚出土の開元通宝について」 『琉球新報』
- [20] 垣市教育委員会 1987 『崎枝赤崎貝塚』
- [21] 濱永旦 1999 『八重山の考古学』
- [22] 殿魁 1991 「試論唐開元通宝の分期」 『考古』1991-6  
李如森 1998 「唐代会昌「開元通宝」銭」 『中国古代貨幣』など。
- [23] 昌開元通宝の出土傾向等については、井上泰也 1994 「出土銭と貨幣史 - 中国貨幣史の側から -」 『古代文化』46 - 4 参照。
- [24] 宮廣衛 1997 「開元通宝と按司の出現（予察）」 『南島文化』19
- [25] 恩納寛惇 1955、1956 「南島通貨史の研究」 『拓殖大学論集』9、10 のち1979「南島通貨史の研究」 『東恩納寛惇全集』4 第一書房 所収
- [26] 恩納寛惇 「南島通貨史の研究」（前掲）では当間鳩目銭の初鑄を『琉球国旧記』を典拠として、明暦2年（1656）としている。
- [27] 琉球新報』1998年10月21日（水）朝刊 詳細は未報告
- [28] 恩納寛惇 1956 「園比屋武御嶽出土の古銭 - 尚真時代のものではない -」 『琉球新報』昭和31年8月28～30日付  
「再び園比屋武御嶽古銭について」 『琉球新報』昭和31年9月12日 のち『東恩納寛惇全集』4（前掲）所収
- [29] 野湾市教育委員会 1997 『宜野湾市クヌヌウタキ：埋蔵文化財緊急発掘調査・拝所復元工事実施報告書』  
なお、クヌヌウタキの鳩目銭出土状態は宜野湾市立博物館に復元展示されている。
- [30] 本昌弘 1989 「帯方郡治の所在地と辰韓廉斯邑」 『朝鮮学報』130
- [31] 和秀 1999 「韓国出土卜骨に対する考察」 『湖南考古学報』10 \*
- [32] 徳志 1974 『増訂 沖繩の習俗と信仰 - 中国との比較研究 -』 東京大学出版会 p.p.84～95